

# グローバリズムと学問

## ——イスラームに関する学問を例に——

ヤマンラール水野美奈子

東亜大学 総合人間・文化学部 文明史学研究室

E-mail: mizuno@po.cc.toua-u.ac.jp

### 1. はじめに

9月11日のニューヨーク世界貿易センタービルへのテロ行為は、全世界を震撼させた。この事件はその後、アメリカが行ったアフガニスタンへの攻撃、テロ行為への対策、政治・経済への影響と実に多くの問題を諸国に残した。日本においても状況は同様である。

こうした世相を反映して、我が国ではイスラーム世界への一般的な関心も急激に高まり、書店にはイスラーム・コーナーが開設され、関連図書が山積みされている。著書は、イスラーム研究者が地味な研究をして出版したものから、9月11日の事件以降俄かに書かれたものまで千差万別である。このような機会でもないと関心が寄せられないイスラーム世界に、私たちイスラーム研究者は複雑な思いである。

報道に関しても同様なことが言える。どの時間帯のニュースでも、アフガニスタン情勢についての詳細な報道とコメントがある。特集番組も多く、記者・解説者・研究者・関係者などが事件のみでなく、イスラームという背景にまでテーマを広げた議論を展開している。

事件から3ヶ月がたち、タリバン政権崩壊後のアフガニスタン暫定行政機構の構想が明らかになり、アメリカがテロの首謀者とみなしているオサム・ビンラディンの身柄拘束も最終段階に入ったと伝えられるなかで、イスラームに関する総体的な議論がマスコミにしばしば登場するようになった。今回の事件から帰納法的にイ

スラーム一般に関しての論議が行われるようになった。

このような状況は、日本人がイスラーム世界に強い関心を抱き、まじめに知識を得ようとする姿勢として、そのきっかけがテロ行為による惨事であったにしろ、肯定的な傾向として受け止められるべきであろう。1970年代以降日本におけるイスラーム研究者の層は厚くなり、イスラーム世界と欧米世界の対立構造の中で中立的な立場からのイスラーム諸学の研究が進展している。このテロ事件に関する報道において、そのような中立的で客観的な立場に立脚した研究や情報収集の成果が反映しているものが非常に多かった事は特筆すべきであろう。しかしテロという突発的事件とそれに迅速に対応できる分かりやすい背景の解説や分析が要求される報道の中には、欧米が作り上げたステレオタイプのイスラームの姿が見え隠れしていることも事実である。

グローバリズムが半ば強要される現代社会において、欧米主導型の異文化圏接触体制から脱却することは可能であろうか？

### 2. グローバリズムの変転

この数年間におけるグローバリズムという表現には、その意味において著しい変転がみられた。数年前グローバリズムが声高に叫ばれ始められた頃、この言葉が政治、経済、社会、文化などの分野で用いられたにしろ、その意図するところは地球を共有する人間の肯定的なスロー

ガンの響きを有していた。しかし時が経つに従い、この言葉は、先進諸国による一種のヘゲモニー的勢力を推進するための危険なスローガンであることが露見し始めた。この変化は政治や経済の分野に止まらず、文化や人々の日常生活においても同様であった。

しかし実際にはそれは、グローバリズムという言葉の意味が変化したのではなく、本来グローバリズムとはヘゲモニーの意味を有しているのに、その本質にばら色の地球規模の平和協調主義というまやかしの衣がかぶせられていたに過ぎなかったとも言える。そしてまた、地球のめまぐるしく変わる情勢のなかで予想よりも早くこの言葉の真意が露見し始めたとも言える。この言葉をばら色の衣で覆った先進諸国は、これほど早くその衣が剥ぎ取られることを予測していなかったかもしれない。

### 3. 新旧のグローバリズム

過去を振り返ってみると、18世紀以降のヨーロッパの植民地主義やそれに続く帝国主義も一種のグローバリズムであった。オスマン帝国の弱体化と崩壊に伴う新たなヨーロッパの国境線の設置、旧オスマン帝国領土のヨーロッパ列強国による分断と支配、植民地確保の動向はグローバリズムに他ならなかった。それは近年のグローバリズムに対して、旧グローバリズムともいえる動きであった。しかし急激にして大混乱を招いたこの世界的規模の大変革期には、そのグローバリズムの仮面を剥ぐ力はどこにも存在しなかった。

ソ連崩壊後のアメリカの大国主義と先進国が掲げた経済の国際化とマス・カルチャーの浸透を主要な目標とする新たなグローバリズムは、しかしながら意外なほど早くその脆さを露にした。このグローバリズム批判の主要な原動力の一つは、皮肉にも二十世紀に地球規模で培われ向上した文化・学問・教育であったとも言えよう。また先進国が推進したIT革命とそれに伴う情報の素早い伝播は、グローバリズムの強化に大きな役割を演じた反面、グローバリズム批

判の動きを急速に伝達する役割も演じた。先進国が提唱するグローバリズムに、人々は地域経済の格差の拡大、それに伴う貧富の差の拡大、マス・カルチャーの弊害、伝統的な地域文化または民族文化の消滅の危機などを敏感に感じたと見えよう。

実現は不可能であろうが、地球全体が共有できる協調的で平和なグローバリズムへの願望と、比較的容易に実現化される経済至上主義のグローバリズムへの危機感が交錯するなかで、9月11日の事件とその後のアメリカのアフガニスタン攻撃は、経済至上主義や先進国が共同で掲げる皮相的なグローバリズムがいかに危険であるかを明確に全世界に示す結果となった。またアメリカ政府要人の十字軍発言や、イスラム世界対キリスト教世界の対立構造発言は、新グローバリズムが歴史や文化さらには人間の日常生活を無視した攻撃的で支配的性格を有するものであることを顕示した。

### 4. 叡智と知恵

ニューヨークテロ事件以後のアメリカの政策や政府要人の言動は、経済・軍事大国であるアメリカが世界の歴史や文化の舞台からおそろしく遠い存在であることを人々に再度認識させた。

アメリカがオサマ・ビンラディンの次にターゲットとすると言って憚らないイラク大統領サッダーム・フセインは、ニューヨーク事件直後に受けたインタビューで「アメリカに今必要なのは戦いではなく叡智である。」と述べている。これは極めて印象深い言葉である。彼が用いた‘叡智’の原語は、アクル・セリームである。訳語としては、英語ではwisdom、日本語では叡智もしくは知恵の訳語が一番適切であろう。叡智が、知識とはことなることは言うまでもない。フセイン大統領のこの発言から数ヶ月が経った。今やアフガニスタンにおけるアメリカのハイテクを駆使した武器、衛星などの最新技術を用いた情報収集など、すなわち高度な知識が、多大な物質的・精神的犠牲と損失に比して

功を奏さなかったことは自明である。アメリカが一大帝国として君臨するためには、そして自他共に認める真の大国になるには、知識と共にフセイン大統領が言うような叡智が要求されるのであろう。

知識は努力、才能、ある程度の経済力で習得できるかも知れないが、叡智はそう簡単には得られない。文化的、歴史的背景と、それらとのたゆまない葛藤のなかで培われるのが叡智である。

## 5. 学問におけるグローバリズム

近年のグローバリズムの隠された真意が意外に早く露見した一要因として、二十世紀における文化・学問・教育の向上を挙げた。この世紀はヨーロッパの自由思想のもとに、実証的な現代学問が開花し、著しく発展した時代であった。欧米をはじめ世界各地での教育の向上、学問の進歩、文化・文明の発展は、人々の思考力、洞察力、判断力などを養った。私たちの多くが、マス・メディアなどを通じて伝えられる出来事の本質を判断できるようになり、新グローバリズムの隠された目標が徐々に露にされていったと言えよう。

しかし教育・学問・文化に依然として旧グローバリズムが支配的であることも事実である。旧グローバリズムが第二次世界大戦をもって政治的視点からは終焉をみても、学問の分野、特に法学、哲学、神学、倫理学、歴史学などの基礎学問では旧グローバリズムの思潮が根強い。ヨーロッパの現代学問の実証的方法論などに学ぶ点が多いが、学問体系、理論体系や解釈論体系などにおいては多分にヨーロッパ至上主義的傾向が残されている。ヨーロッパ文化圏に属さない異文化圏における上記のような基礎学問の分野を、ヨーロッパの学問体系、理論体系、解釈学体系に当てはめることは本来不可能であり、多くの矛盾を引き起こすが、ヨーロッパの学問体系や理論体系などに普遍性を信じる傾向はまだまだかなり強い。

私が携わっているイスラーム美術史から一例

を挙げるならば、イスラーム美術をヨーロッパの美術史概念で捉えていこうとすると、イスラーム美術の本質を形成する多くの要素が、ヨーロッパ美術にない要素であるという理由だけで、葬られてしまう。例えば、イスラーム美術で最も重要な分野に‘書’がある。しかし西洋美術史の概念では‘書’を十分に捉えることができない。美術を基本的には視覚芸術として捉えるヨーロッパの美術論においては、書芸術に内在する言葉の響きすなわち聴覚的側面は完全に無視される。単に書体の様式などの形体が取り上げられるに過ぎない。

## 6. 学問におけるグローバリズム崩壊への兆し

教育・学問・文化の向上は、社会的に一部の地域や分野ではヨーロッパ至上主義に対する急進的な運動を引き起こした。1980年代から顕著になった民族紛争や諸宗教の原理主義運動はその例である。

学問の分野で、1970年から80年代にかけて、ヨーロッパ至上主義への批判がイスラーム文化圏またはイスラーム文化圏出身者から少しずつ起こり始めた。このこの時代を代表するのはエドワード・W・サイードであろう。彼はパレスチナ出身でアメリカ合衆国市民権を得た英文学・比較文学者である。1978年に著した『オリエンタリズム』(1993 平凡社)において彼は、ヨーロッパがイスラーム世界も含めたオリエントに単一的アイデンティティーを与えながら、いかに巧妙に実際とはかけ離れたステレオタイプ的なイメージを作り上げ、イスラーム世界を含めたオリエントを意図的に過小評価したかを明らかにしている。批判も多かったが、総体的には強い共感を読者たちに促した。この著書は、非常に反響を呼び、現在ではイスラームも含めたオリエント研究では必読の書である。この著書の出版は、ヨーロッパ至上主義的な歴史観や歴史解釈に大きく歯止めをかける契機となった。

『オリエンタリズム』に触発されて、イス

ラーム世界の、あるいはイスラーム世界出身の研究者たち、そして日本のイスラーム研究者たちもまた基礎学問におけるヨーロッパ至上主義の流れを少しずつ変えていった。

こうした動向のなかで、アメリカの政治学者、サミュエル・ハンチントンの著した『文明の衝突』(1996 集英社)(雑誌での発表は1993年)も大きな反響を呼んだ。アイデンティティーの探求が文明間の衝突を導き、将来イスラーム世界のみでなく中国をも含んだ‘西欧対非西欧’という大きな対立構造が生じることを説くこの著書は、イスラーム世界の有識者たちに強い危機感を抱かせた。それは新グローバリズムがひきおこす可能性のある更に危険で複雑な対立構造であった。

ハンチントンの著作とその理論‘文明の衝突’をおそらく意識していると考えられるが、イランの大統領モハンマド・ハタミは1998年の国連総会で‘文明の対話’を提唱した。それは時期を得たものであり、2001年は‘文明の対話の年’との決議が採択された。

ハタミ大統領がそれを記念して各地で行った講演をまとめたモハンマド・ハタミ著『文明の対話』(2001年 共同通信社)では、イスラームの思想や学問が、現代我々の共有する諸問題にどう関与できるかが極めて肯定的に記されている。

ハタミ大統領の主張には、ヨーロッパ至上主義への穏やかな牽制と欧米世界との共存へ向けての摸索が読み取れる。

ヨーロッパ中心主義に偏った基礎学問のグローバリズムを修正したり、そこからの脱皮を試みる場合、多くの問題と衝突するであろうし、また容易には達成できない問題も多いであろうが、修正や脱皮の動きが静かに進行していることは事実であろう。